

佐藤惣之助詩華集

アンソロジー

—全詩集より収載—



詩の家編

佐藤惣之助^{アンソロジー}詩華集

—全詩集より収載—



明治23年12月3日 誕生
昭和17年5月15日 逝去

詩の家編

郎が装幀しました。扉に“昭和六年刊行詩集西藏美人以降の作六十五篇”と記されています。

わたつみ（綿津見）——とは、海を司る神のことで、広義に海洋をイメージしているかと受取っていいでしょう。

新古典主義詩として古典語のもつ色と響きと匂い、高度の詩法によって創作された感覚の世界を描きだしています。

「南位」について、こう自註しています。「これは私の方向、性格、趣味、イメージの表現で、中温地帯に生まれた私は、いつも北方より南方を思慕している私の骨格も、ややボルネオ族に似ているというから、母も妻も友人も皆私を南方へ首を曲げている駝鳥のように思っているであろう。結局眼にも見えずいつともはかられぬ霊のようなものが、そのふるさとを慕っているのではあるまいか」

「わが歌」の自註では、「粗野で乱調子で、独りよがりでしかも放情自娛のものが私の歌である。同じ形式というもの

を好まず、あらゆる人性の分野に於ける形態を、その詩の内容に応じて探ろうとするもの、結局最後まで、未完成であろう。」と述べ、最後の最後まで、あくなく前進を志向しています。



以上、惣之助について若干参考になることを記しましたが、群盲の象を撫でる如く、觸れ、ば觸れるほどその偉大さに溜息をつくばかりです。

惣之助五十回忌を記念いたしまして、ここに個人詩華集を刊行した次第です。なお若い読者のために、仮名遣いを改め、ふりがなも適宜つけました。詩人惣之助の詩魂に少しでも接して頂けたら望外の喜びでございます。

アンソロジー
佐藤惣之助詩華集 <詩の家編>

——全詩集より収載——

●平成3年5月15日 発行

発行者 佐藤 宗三

発行所 詩の家

東京都世田谷区玉川台2-11-13

頒価 ￥1,000

印刷所 東洋プリント株式会社

目次

第一詩集 正義の兜

久遠の正義

天分

姥子にて

夕日の色

旅より

偉大な日

我は叫ぶ

埋れたる宮殿

第二詩集 狂へる歌

燃ゆる町

泣いて駆けてゆく女

生命の顔

第三詩集 満月の川

春の港の街にて

華麗なる川

天文台

洗濯女

港内にて

暮春

第四詩集 華やかな散歩

序一

川（A）

船乗りの母

漂流人の墓

ステーション

鶯と太陽と墓掘

相模の片田舎にて

娼婦

子守娘

赤楊の花

第五詩集 荒野の娘

百姓 その二

船

神

四月の相模川に沿いて

田舎の山

華やかな散歩

漂流者の歌

大きい田舎の女を

麦の中で

私の家

青い桃をもって

田舎の寺にて

落葉

第六詩集 深紅の人

潜水夫

怨霊

小悪魔

喧嘩

第七詩集 季節の馬車

蝶の出帆

匂いと響き

青胡瓜

仄かなる午前の風

水のほとりにての感想

南かぜ

智恵の輪

50

52 53 54 56

58 58 59 59 60 60 61

信仰への感覚

月

爽怨

幽艶

英

旅行

虹の懸れる幽愁

第八詩集 琉球諸島風物詩集

宵夏

やんばるのちるのために

乙女座の下で

琉球娘仔歌

阿嘉島にて

異境の鬼

アハレン岬にて

石敢当

61

62

62

63

63

64

64

66

66

67

68

68

69

70

70

王城跡漫步

雨中点心

祝女の家泊りて

辻町雨月

より紅き仇花に

八重山乙女

第九詩集 雪に書く

ゴロツキ

悔む……

雪に書く

市民

春風入座

真理

第十詩集 颯風の眼

71

71

72

73

74

76

76

77

77

78

78

颯風の眼

春風

横浜港

波浮港

島原港

新年

情人

沙上の狐

第十一詩集

水を歩みて

山中湖

青木ヶ原

三原山

白馬頂上

下田港

松崎港

天城山

船原浴泉記

吉野山

法隆寺

台北大稻埕

第十二詩集 情艶詩集

わが家の下婢

李と鴛鴦

朝、ペンを撃って歌う

麵麴

蚊帳に寝た

幽人めいた

魚は扇である

桜

入浴

おとおばい

90 90 90 89 89 88 88 86 85 84 83 83 82 81 80

98 98 98 97 96 96 95 95 94 94 92 92 91 91

第十三詩集 トランシット

龍

桃の枝

北越線

ハルビン

街上装身

千里の旅より帰りて、又古き

女房とともに月を見る

晝眠月輪

家

清気大来

西遊記の一節

必死の男

第十四詩集 西藏美人

反蜀

108 106 105 104 104 104 103 103 102 102 101 100

歴史・地理

印度

青海省

女流水泳選手について

鵬程

日曜

幼年

チヨコレート工場

温泉場

笑い鳥

横恋慕

今ン日

蚤

シネマ見物

虎

白菊

氷見歌

116 115 115 114 114 112 112 112 111 111 110 110 109 109 109 108 108

第十五詩集 花 心

短剣

海の女

汽船に就いて

春

貸ボート

第十六詩集 怒れる神

蘇州小曲

杭州西湖之歌

揚子江を遡る

タクワンの音

第十七詩集 わたつみの歌

祭の日

126

124 123 122 122

120 120 119 118 118

南位

わが歌

天の秘密

酒杯

猫弓

海の花嫁

四行抄

夏来にけらし

高野抄

潮岬

佐藤惣之助詩華集について

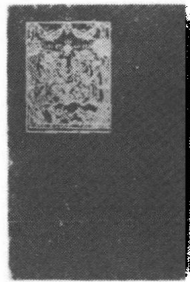
135

134 132 131 130 130 129 128 128 127 126

第一詩集

正義の兜

○大正五年一月一日発行
○天弦堂書房刊



処女詩集であるのみならず、惣之助のすべての著書の初めとなる本。扉書に
「この書を千家元麿兄に送る」とある。自費出版五百部刷り、売れたのは20部。
まえがきに「詩作とは生きることである。殆んど獅子のような勢いで詩を書
いた」と述べています。若い情熱がほとばしり、大衆と共に生き、太陽や野の
花に祝福される、逞ましい生命力に根ざした、惣之助流の人道主義詩です。

久遠の正義

おお久遠くおんの正義は

人類も一切のものも

揺ぎ倒し

裂きすてて歩み行く

現世と現象に囚われたる哀れなる我

我が惨事と

我が悪と害毒を訴えて

裁かれんと願えど

久遠の正義は

我が善美も醜行をも秤はかる事なく

自ら我に報い来り

強き怨毒えんどくを残して宙に進み行く

おお恐ろしの進行

応報も輪廻りんねも踏みにじり

害するものも害さるるものも

等しく月日の陰に亡び行く

現われとして生ぜしもの

現われずして生くるもの

無意無識の混渾界こんどんかい

いや凄まじの原因界

そこに我が粒なす影

啾々しゅうしゅうとして泣き悩むなり

おお我は我を亡ぼし

久遠の意識にひれ伏し

ただ日の表と

風の暗に

本性の何物かを持つばかり

いみじき信欲を逞うし

我が性の根を食い

意志の成実力をあげて

空中の無の腹を翔かけるばかり

ああ原因なせる大力よ

その成実の生命

我がこの哀れなる個体

現象と個別に悩む心理をして

大なる意識に戻し

ただかの久遠の精と響に

この胸を粟立たしめ

この血をおしげなく使用せしめ給え。

☆第一編「我と我が戦い」の九十

天分

天分がない事は恐ろしい

自分は自分の天分に立たないでは何事も出来ない

自分の自由を感じられない

運命は天分の心である

天分の力と本能を漂々しく起こせ！

天分の理性の高き香氣を有せよ

氣凛は意識や行為の奥より発す

絶対の高根にはただ天分のみ生く

天分を強く濃く有せよ

そしてたましいの自由をふり立てよ

たましいは楽しき力を有す

声をあげてもろもろの苦痛と戦いにのぞむ

自分はその声を信じ

自分の天能と運命を明かに見得る事を信ず

自分の天分のリズムと実在をして

猛々しくあらしめる自分の氣律を信ず

自分は触れている自分のいのちを感じず

未来と地盤と希望を感じず

しかしますますそれは空恐ろしい

自分は自分を自由に生じさしたるものの意志を知る

自分の気格と本能の力の高さを知る

おお天分は自分の力なり、実質なり、糧なり

自分はますますこの恐ろしさを生かしたい。

☆第三編「四大の運行」のうち

姥子にて

妻の頬は白

妹の頬は紅色をしている

私と三人 灌木の美しい雑木林へくると

日が綾のように我々を射た

青い木の実が降って

明緑色の木の葉の枝々が

肩の絹物に触って清い葉ずれがする

立止まると吸いつくように木々が静かで

熔岩と暗緑色の水成岩が

麗かに日と水の色の中に艶を出している

やわらかい雨の土の精気が

目の玉にふれてしみこむようだ

下陰の明るい栗色の空気の中に

黄金色の真直な木が生えていて

一本、二本、三本と肌を出して立っている

岐路は狭く露は深く

夕の星が輝き出しそうだ

魔王は今眠っている

妖女は爪を隠している

鳥の美しい声は山の谷に響いて

木々は子供のように楽しそうだ

清い峡瀬の水にうつる紅や黄の実

雉子の尾や頬白の尾が見え隠れ

黒い黒い倭小なつげのげの枝は地に匂い

老人の子供のような林は

黄金の木のために輝き静まっている

おお、ここに黄金の木がある

これを見ていると身の内まで光ってくる

妻と妹と自分は

その前後を歩きながら

楽しい今宵の宿へ急いでいる

旅の夕は露に地が輝き

空と木々の枝葉は光に濡れている

おお幸福は不用意には来ない

いかなる處にも強い幸福は

黄金の木のように愛から生えている

土、植物、岩石、水、火、空、鳥、獣

それ等から受ける我々の有益な変化は

いかなる場合でも幸福でなければならぬ

外界は内心の恵みで遊覧地で

我々のたましいは楽しい露を吸う

そして林の中の黄金の木のように

自然と誰に見らるるとも

心にかげず光っている。

△黄金の木とは猿滑りの木を見て暗示をうけたもの▽

☆第三編「日夜の窮乏」の一

夕日の色

ああ夕日は苦患の色だ

困憊^{こんばい}した怒りの悩ましい色だ

夕日の平和は凡人が想像すべきものでない

太陽と時間は知らず

現実の働きの赤い熱情か

否応なしに傾いて行く疲労は

真に太陽の如く働けるものの悲歎だ

疲れたものに死が、窮したるものに和らぎが

ああ自然が

有無を云わせず頭に迫ってくる

おおあの夕日の色は

誠に激鬱^{げきうつ}の心の色だ。

☆第三編「四大の運行」のうち

旅より

切ない程可愛い妻よ

俺は今 岩のように鹹雨^{かんう}にさらされ

独りころがって無言の

狂いそうな陰鬱^{いんうつ}に悩んでいる

俺は眼前の空気を

おまえの身についている純潔な

優しい優しい静かさにしたいと願っている

おとおまえの姿を思い浮かべると

身体中から涙がでてる

おまえも俺の旅の難苦をおもって

今頃は一人祈っていてくれよう

おお俺は殺伐な程おまえが恋しい

おまえ個有の深い深い静かさ

おまえの優しい豊かで従順な声が

ああ幻聴になって俺を慰めるのかかえって

苛酷な程俺には切ない

ああ千萬の年の時間の中で

いくらない俺の生涯の

たった一人の貞潔な妻よ

先天的に運命の星が

俺とおまえを無限に導いて

永久に幼い親しい嚴肅な結合が

俺の半身を剥ぐほどおまえについている

俺はこんな離れて悩みさいなまれても

おまえの心情の動悸^{どうき}や

雨のような柔らかな愛が

俺の動悸と一緒に血を出しているのがわかる

永遠の恋の幻は

おまえと俺によって純粹の光を出している

おまえのなやかな肉の香気や

おまえの幼い程きれいな性質が

おまえの心の作用と共に

俺の調和に欠く事のできないものだ

おお無窮の精神で

妻よおれはおまえと共に泣く

こやって別れて俺は苦しんでも

おまえの悩みや切ない心を思うと

ほんとに俺もたまらなくなる

おお恒久不変の

俺のたましいのある限り

おまえは俺の妻であり天使だ

いつも俺はこれ程とは思わなかったが

今の俺は胸の血をかきむしって

おまえの幻と永久の姿に

俺の全靈魂を深く深く刻みこんでいるのだ

☆第四編「力の断片」の一

偉大な日

偉大な偉大な日

大きな大きな日

強い強い日

俺の頭は自然と下る

俺の心は勢いづいて来る

朝、高貴な朝

萬物の生々とした朝

初まれ

初まれ

一切は初まれ。

☆第四編「力の断片」の二十

我は叫ぶ

我は叫ぶ

我を理解せぬもの我を入れぬものに向かつて

我を欲せず我を知らざるものの有無に関せず

我が一生を我を入れぬもの我を理解せぬもの

我を愛するを知らぬ者に我は一生叫ぶ

私の理解され入れぬ事に関せず我は叫ぶ

我は感ずべく生れたり

叫ぶべく生れたり

而して一生入れられず理解されずとも

理解され入れられるものとして叫ぶなり

我はかくさけぶ一生を通じてさけぶ

我に難苦を感じるものは

我を生かす自然を侮ずして我無氣力を罵れ

我に哀さ憎ましきを感じるものは我をして一生を通ずる

力あるものを捕えて

その者の意志を笑い見よ

我はかくさけぶ

一生を通じて我が感ずる事を

我に關せざる者にもさけぶ。

☆第四編「力の断片」の三十九

埋れたる宮殿

いづこにか埋れたる宮殿ありて

永遠の帯にとりまかれ

緑の木々の下に座し

我をば静かに見守り

善美の光り

瞳と口に漂い

いつまでもいつまでも我を待つ如し

おお我性の苦しみ

胸なる炎の為に

我は部分たりとも

我が妻

我が妹

我が母の内に

その光その静かさ美しさを

見だす日はよろこび限りなし

おお人類の母

永久の處女は

いづこよりかこの世の我に

かの光 色を帯びて

空の又空に漂う。